九州産業大学国際文化学部紀要　第6号（1996）

ウイリアム・サロイアンの青年時代：故郷フレズノを去ってからの後の文学修業時代

立　山　　昇

（1996年5月13日受理）

1

ウイリアム・サロイアン（William Saroyan）は，現代アメリカ文学の中では特異な存在である。それは，自己の姿を生々しく作品の中に出しているという点で，そう言える。

アメリカの現代作家は，一般的に，自己主張は十分にしているにしても，自己の姿を作品の中で，色濃く提示することは少ない。サロイアンの代表作といってよい *The Human Comedy*（人間喜劇）を例にとって見ても，主人公ホーマー少年は，サロイアン自身であるし，舞台となっている町は，サロイアンの生まれ故郷フレズノであることは，読者にはすぐにわかる。

このように考えてくると，サロイアンの文学は，作者自身の生い立ち，実人生を考察することなしに理解することは，不可能である。作品を理解することは，サロイアン自身を理解することだと言ってもよい。

そこで，この論考では，サロイアンの essay 集の一つである *Places Where I've Done Time*（折り折りの記）の中で，1926～1932年まで，つまり作者が17～18歳から24～25歳までの間のことについての，エッセイを取りあげて，その中に表されている，サロイアン自身の姿，文学修業をしている青年の姿について，論じてみたい。

2

サロイアンは，1908年8月に，カリフォルニア州フレズノ市（Fresno）に生まれた。彼は1911年フレズノを去り，数年間オークランド（サンフランシスコの近く）の孤児院に入れられた後，フレズノに戻って来た。そして高校を中退するまでフレズノで育つのである。そして，やがて，故郷の町フレズノを去る日が来た。それが1926年7月でサロイアンが17歳の時であった。故郷フレズノを去って，初めて行った所がロサンゼルスであった。その辺のことを，彼は次のように書いている。

A few days later I hitched a ride—— anywhere. And I arrived in Los Angeles and found a room in a very old building behind the brandnew Public Library. And a job at Bullock's Department Store—— Delivery Department. But after three days I couldn't ignore the sickness that had seized me, so the boss of the Delivery Department sent me home.(1)

サロイアンはフレズノからロサンゼルスまで，他の人の車に乗せてもらって行くのである。著者は，その区間を何度も，バスと列車で行き来したことがある。現在は，高速道路ができているが，途中には 1,500m 級の山脈を越えるし，今でも約4時間はかかる。その当時はもっと時間がかかったであろう。一日がかりの旅だっただろうと思われる。7月には約40℃を越えたりもするという暑さの中での旅である。

彼はロサンゼルスの公立図書館の近くの部屋に住むのである。ダウンタウンの，現在は Bank of America のツインの高層ビルが建っている近くに，ロサンゼルスの以前の公立図書館があったが，それは火事で焼けたそうで，現在は別な場所に移転している。とにかくそのあたりは，今のダウンタウンの高層ビルが建ち並ぶビジネス街になっている。

さてサロイアンは，デパートに就職口を見つけたが，病気になってしまい，自分の部屋に戻り高熱を出してしまった。そのあと，故郷に帰る金をもっていなかったし，また，帰りたくもなかったので，別の仕事を見つけようとするのである。

そのあたりの事情を，彼は次のように述べている。

I found a recuiting tent in a downtown park, and joined the National Guard for two weeks in Monterey at a dollar a day——...(2)

作者がロサンゼルスで次に見つけた仕事は，the National Guard，つまり，カリフォルニア州の州兵である。モントレーというのは，カリフォルニア州の海岸にある保養地で，サンフランシスコの少し南のあたりにある。高級な保養地というイメージの強いところである。ロサンゼルスから約400キロほど，北へ行ったところへ移動したことになる。そこで2週間働いたのである。

3

フレズノを去ってから三つ目の仕事についたのは，サンフランシスコにおいてであった。そのときサロイアンは18歳になっていた。そこで彼は作家になるための修業をするのである。

> My next stop was San Francisco, after visiting Fresno a couple of days, mainly to let everybody know I was on my way. I was just eighteen, and it was about time I started my career in earnest, whatever my career might turn out to be. I was a writer, but how could I be absolutely sure about such a thing when nothing I had written had appeared in print, and I had no money and no proper place in which to work ?(3)

文学修業中で，彼は毎日のように書くのは書いていたが，それらはまだ出版されたことはなくまた金もなかった。

とにかくサロイアンがロサンゼルス，モントレーに次いで3番目に移ったところは，サンフランシスコであった。ロサンゼルスではほんの3日ほど働いただけであり，その他仕事捜しに費やした時間を入れても，1～2週間しかいなかったようである。またモントレーでは2週間働いたと言っているので，それらは，いずれもほんの短い期間であったことになる。しかし，短いとはいっても，故郷を飛び出し，仕事を見つけ，自立するということは，しかも17歳の少年がそれを始めたということを考えると，彼の人生にとって，大きな意味をもっているといえよう。

サンフランシスコには，だいぶ長くいたようである。また仕事もいろいろしたようである。そういう意味でも，このサンフランシスコは，彼の文学修業の上で，大切な一時期であったといえよう。サロイアンは，サンフランシスコを，自分にとっては，"a rather exciting place(4)" であったと書いている。そのサンフランシスコでの生活について，サロイアンは次のように書いている。

> San Francisco was the place that followed Fresno, and it was a whole new world, with a far better location, climate, culture, and humanity. But I traveled from San Francisco, too. I had to see everything, or

as much of everything as I could possibly manage with the money I earned, or won at gambling, or acquired from the faithful cultivation of my skill as a writer—— and from the hard work of writing.(5)

サロイアンはここで「フレズノに続いてサンフランシスコだった。」といっているが，実質的に長い期間いたところは，という意味である。このサンフランシスコは，彼にとって初めての土地ではない。幼いころ，孤児院に入っていたとき，母に会いに時々行っていた。孤児院のあったオークランドは，湾をへだてて，サンフランシスコと向かい合っている。当時は多分フェリーで行き来したのであろう。「私は，すべてのものを見なければならなかった。」というのは，社会のすべてのものを見て，そしてそれを文学化しよう，という意欲の表れである。彼はこのころ，18か19歳だが，本気で作家修業をしていたようだ。

仕事先の一つは，the Postal Telegraph Company（郵便電報会社）であつた。その会社は，マーケット通りにあったが，その仕事の一端を次のように書いている。

And now, fourteen years later, I was working on Market Street. A man came into the office, sat at one of the three tables, and for about an hour he wrote a telegram and crumpled it and threw it in the wastepaper basket, and then at last he came to the counter, and I counted the words in the telegram, looked at him, told him the charge, and he went away.(6)

マーケット通りは，サンフランシスコの最大の大通りであるが，その通りに面した会社にサロイアンは勤めている。そこへ一人の男がやって来て，電報の文面を書くが，何度も書き直し，一時間もかかってやっと書き終えて，カウンターに提出したというのである。アメリカは多様な人々が住んでおり，英語がよくできない人も多い。この男も，そういう人かもしれない。電文を書くのに一時間もかかったというのである。そういう人を見ているサロイアンの目は優しい。そういった庶民の姿を，この会社で働きながら観察しているのがよくわかる。

4

サンフランシスコの次にサロイアンが移ったのはニューヨークであった。ニュー

ヨークについたときの気持ちを，彼は次のように述べている。

> It was very simply the greatest feeling in the world for me to arrive in New York and go to a hotel and go to my room and set up my work, and to write something, and then to go out into the city and walk and look around.(7)

作者はニューヨークに着いてとても嬉しいという気持ちを素直に表明している。町の中へ出て行って，歩き回り，そして自分の文学を作り上げる努力をしようという希望に満ちている。

サロイアンは，サンフランシスコからニューヨークへグレイハウンドバスに乗って行った。そのことを彼は次のように書いている。

> When the Greyhound bus finally arrived in New York, and I got off, to make my way to fame and fourtune late in August, 1928, the hour was almost midnight, ...(8)

1928年ということは，サロイアンが19～20歳のときである。彼は「名声と富」を求めてニューヨークへやってきた。文学者として名を成し，富も手に入れようという，青年らしい希望を抱いて，大都市ニューヨークへ到着したのである。

心は希望と意欲でいっぱいだったが，現実は厳しく，次のように述べている。"I knew nobody. I had no letter of introduction to anybody."(9) つまり，誰一人として頼る人のいない都会へ，一人でやって来たのである。彼はまた，次のようにも書いている。

> Cash on hand came to a dollar and a few coins. The rest of my money, almost a hundred dollars, was in my suitcase, and the suitcase was lost, stolen or misdirected—— that's what the baggage clerk in New York said.(10)

手持ちの金は1ドルと少々であった。それが全てであった。約100ドルをスーツケースにいれていたが，そのスーツケースがなくなっていた。その中には自分の衣類等も入っていたであろうに，それも無くしてしまったのである。金も無く，持物もなく，

まさに体ひとつで，一人の知人もいない大都市ニューヨークの夜の町に着いたのである。

そしてニューヨークの夜の町で，サロイアンは泊まるところを捜す。やっと捜しあてたのが，YMCA ホテルであった。

> The room was a dollar in advance, and that left very little, but even a little is something.(11)

ホテル代を1ドル支払って，残りは a few coins（ほんの少しの小銭）しか残っていない。それでもその金は，それなりに価値のある「たいしたもの」であった。

彼は，そのホテルのレストランでサンドイッチを作ってもらい，部屋へもって行って，水道の水を飲みながら食べる。その様子を次のように描写している。

> I drank four glasses of the cold water before I finished the sandwich–it was so good I kept saying to myself, "I'll make it, lost suitcase or not. I'll make it."(12)

サンドイッチはたいそうおいしかったので，自分自身に言い聞かせる。「スーツケースを失ったか否かにかかわらず，おれはやるぞ。やるぞ。」このうえない惨めな状態でありながら，意欲に燃えて，自分自身を励ましている。こうしてサロイアンは，ニューヨークでの第一夜を過ごしたのであった。ニューヨークでの第一歩がこのようであったのだから，サロイアンのニューヨークでの文学修業が，容易なものではなかったことは想像がつく。

サロイアンは，彼の人生について次のように書いている。

> All of my time, the very earliest, the latest, the most recent, all of it, every instant of it has never been totally free of sorrow.(13)

サロイアンの人生には，いつも「悲しさ」が付きまとっていたのである。ニューヨークでの生活にもこの悲しさはついてきていた。

しかし，悲しさに負けないで生きようという意志が彼にはあった。彼は言う。"There was almost never a complaint, because complaining was in bad taste, ..."(14)「自分の人生には，不平不満はなかった。なぜなら不平不満を言うことは，下品

なことだったからだ。」という。さらに次のようにもいう。

> Also there at all times, side by side with the sorrow, or possibly even a part of it, was humor—— an awareness of air, light, sounds, smells, and unaccountable ideas.(15)

あらゆるときに，悲しみと共に，そこには「ユーモア」があった。そのユーモアとは，現実の光の部分とも言えるものを感じること，とでも言えようか。そういう意識を，自分の中に取り戻そうと努力していたのであった。このユーモアこそが，悲しみを乗り越える彼の生き方だったのである。こうして19～20歳の青年がニューヨークに来て，文学修業に新たな希望をもってのぞんだのであった。

文学修業に欠かせないのはタイプライターである。サロイアンは，タイプライター店にいく。そこで，店の人から新しいのと中古のものを見せてもらうが，彼は新しいものを買う。

サロイアンは，the Postal Telegraph Office で働くようになった。毎朝5時に起きて仕事場へ行き，午後3時まで働いた。それ以降は，町を見物する時間であった。

彼はそのことを次のように書いている

> I was off duty at three in the afternoon, whereupon I continued my explorations of Manhattan, Brooklyn, Coney Island, Jersey, and other places accessible by subway or by other inexpensive transportation, like ferry-boat rides for a nickel—— to Jersey, to Staten Island and so on.(16)

マンハッタン，ブルックリンなどへ，地下鉄やフェリーなどの安い乗物に乗って，見物にでかけた。サロイアンにとって，文学修業は，文章を磨くこと，本を読むことなども大切だったろうが，それ以上に，人間が生きている実際の姿を見ることにより，そこから，人間の生き方，考え方を学ぶことを重視していた。単なる知識だけで終わっていないのである。

5

ニューヨークには4カ月彼はいた。そして1929年1月にサンフランシスコに戻るの

である。ニューヨークでの生活について，サロイアンは，次のように書いている。

> ...for I considered my four months in New York a total failure, and my return to the large long unfurnished flat on the third floor... for I has set out in late August of 1928 by Greyhound bus in the expectation of never going back to the comfortable, purposeless, quarrelsome, impossible life at home.(17)

サロイアンはニューヨークでの4カ月の生活を「全くの失敗」だったと言っている。サンフランシスコを出るときには，もう二度と戻らぬつもりだった。ここで at home という表現は「故郷での」という意味に解した方が良いと思う。彼にとっての故郷は，「フレズノやサンフランシスコ」と考えて良いだろう。家族はサンフランシスコに住んだりしていたようである。サンフランシスコはフレズノからは，列車で約5時間だが，文化的，地理的，人的な交流は深いようで，フレズノは，サンフランシスコを中心とした Bay Area といわれる地域からサン・ウォーキン川をさかのぼった，上流部にある。

彼は当時20～21歳であったが，「失敗した」という心を抱いて，家族のいるサンフランシスコに戻ってきた。brother といっしょの部屋の中で，今は失業の身ながら，自分のニューヨークでの生活について振り返るのである。

> I sat at my desk and reflected on the enormity of my failure in New York, and I felt glad to be out of a crazy expectation like that—— to become a great writer—— no, a great man, but not so much to *become* a great man as to make known to the world at large that I *was* a great man. I felt glad that I didn't have keep trying to decide what to write in order most effectively and speedily to bring about that condition.(18)

その失敗というのは，「自分が偉大な作家になること，自分は偉大な人間だということを，世界の人々に知らしめること，そういう気違いじみた期待を抱いていたということ」であった。その野望が無残にも打ち砕かれて，嬉しかった，と作者はいう。肩の荷が降りたという気持ちだったのだろう。そういう気持ちの変化が，作家修業のあり方にも，大きく影響を与えているだろうことは，容易に解る。

作者はこうした気持ちの変化を味わいながら，サンフランシスコの町を見ながら，自分の部屋でこう考える。

> ...and I thought, "Now, all I've got to do is find a job, take out one of the nurses across the street, marry her, and settle down, that's all. Nothing but fun."(19)

自分の部屋から見える病院の看護婦さんと結婚しよう。そのためには仕事も見つけよう，と思う。つまり，大作家になろうと，それのみを目標に文学修業に励んでいたのに比べると，普通の人と同じように仕事をして，結婚する，という生活をする。それが自分の今しなければならないことだと気付いた。つまり，夢を追うより，現実にしっかり根を下ろして生きることを第一とする決意をしたのだ。

サロイアンは，次のように述べている。

> "Why aren't you writing?"
> "Henry, man does not live by writing alone."(20)

毎日サロイアンは，机の前に座って，ものを書いていたのであろう。その日に限って彼が書いていないので，兄弟のヘンリーが，「どうして今日は書いていないのだ？」と問う。それに対してサロイアンは，「人は書くことだけで生きてはいないのだ。」と答える。文学修業をやめたというのではなく，現実をしっかり踏まえたうえで，作家を目指して努力しようというのである。この後サロイアンは，翌日の朝，職業紹介所へ仕事を探しに行く，と告げるのである。

6

サンフランシスコでの文学修業時代に，意外に思われるのは，サロイアンの教会通いである。深い信仰心があったようではないが，一つの気分転換のつもりと，金が無いので，金のかからないことの一つは，教会に行くことだった，というのが理由のようだ。彼はいう。

> After supper I frequently set out for a walk of restoration, thought, and peace, having in mind that I might just go into the little church

and take a chair in the last row, and look and listen for a while. It was a church founded by several black people, ...[21]

自宅の近くの教会に，夕食後，散歩の途中に，入って行く。最後列のイスに座り，そこでしばらく時間を過ごす。それは，金はほとんどなくても行けるところであり，同時に気分をリラックスさせることもできる。彼はそこで，人間を観察していたのでもあろう。この人間を観察するということは，彼の文学修業に大きな意味をもっていた。

7

ニューヨークから帰って来てから，サンフランシスコでサロイアンは，自分の家族と一緒に住んだ。そのあたりのことを，次のように述べている。

For a while after 1929, after my return from New York, the five of us in the family moved across the street 2378 Sutter Street to 1707-A Divisadero. I worked whenever there was a job, and for $10 I bought an enormous old-fashioned baby-grand piano—— sometimes I put a blanket on top of it and stretched out up there for a nap.[22]

サンフランシスコへ帰ってきた1929年に，自分を含めて5人家族であった。その家族は，しばらくしてから，住まいを移す。作者は，仕事が見つかれば，どんな仕事でもその仕事をした。また。ピアノを買ったということである。baby というのは，「小さな」という意味で，「小さなグランド・ピアノ」を買い，時にはそのうえに毛布を敷いて，うたた寝をしたりしていた。

8

1932年，サロイアンが23～24歳の年に，一つの注目すべきことが書かれている。それは，競馬を始めたことである。賭事は，その後永年にわたり彼の好きなことの一つになるようだが，その競馬について，作者はこのように書いている。

And so it went. The weather was good. It was better at Tanforan than in San Francisco, only eight miles away. There was nice

> smell at Tanforan—— of earth, horses, people, money, hot dogs, hamburgers, coffee, cigarette smoke, and something else. I really don't know what the other thing was. Was it comedy hovering over and crowding around everybody?(23)

Tanforan という所に，競馬場があって，彼はそこに時々行って遊んでいた。そこで友人たちと，談笑したり，お互いに助け合って，楽しく遊んでいたのである。たとえば，行き帰りに，車に乗せてもらったり，競馬場の入場券を友人からただで貰ったりしていた。そういうところを comedy だといっているが，彼が，そこでいかにリラックスして楽しんでいたかがわかる。ただし彼は金は少ししかもたないので Henry（兄弟）からお金を貰って出掛けていたのである。賭ける金もほんの少しずつであったらしい。競馬は，金もうけのためというよりは，気晴らしや，仲間との交流を楽しむためということだったらしい。それも，人間から様々なことを学ぶという，文学修業のひとつであったと言える。

9

以上が1932年，サロイアンが23～24歳までの文学修業時代をたどって来た。この年までは，まだ彼は世間には全く知られていない，無名の文学青年であった。まさに修業中であり，貧乏を味わいながらロサンゼルス，ニューヨークなどを移り住んで，サンフランシスコに帰りつき，そこでさらに修業を続けているのである。1929年が，ニューヨーク・ウォール街の株の大暴落の年であり，その後の経済恐慌，そして数え切れないほど多数の失業者が溢れている時代であった。この厳しい経済状況の中でサロイアンは青年時代を過ごしたのである。しかし彼には，作家になるという大きな夢があり，それに向かって日々努力していた。この日々のことを書いているエッセイを読んでも，暗い気分にはならない。現実にはとても辛い体験をしているのに，彼はユーモアこそが，人生の救いであるということを，この青年時代からつかみ取ったのである。

注

（1） William Saroyan, *Places Where I've Done Time*, Praeger Publishers, Inc., 1972, p. 158.
（2） Ibid., pp. 158–159.

(3) Ibid., p. 159.
(4) Ibid., p. 159.
(5) Ibid., p. 113.
(6) Ibid., p. 31.
(7) Ibid., pp. 159–160.
(8) Ibid., p. 28.
(9) Ibid., p. 28.
(10) Ibid., p. 28.
(11) Ibid., p. 29.
(12) Ibid., p. 29.
(13) Ibid., p. 41.
(14) Ibid., p. 41.
(15) Ibid., p. 41.
(16) Ibid., p. 126.
(17) Ibid., p. 19.
(18) Ibid., p. 19.
(19) Ibid., p. 20.
(20) Ibid., p. 20.
(21) Ibid., p. 92.
(22) Ibid., p. 157.
(23) Ibid., p. 16.